

孤独の塔

他者との出会いに向かう道が開けたとき、孤独は始まります。

例えば、愛する人を失ったり、暴力的な場面を目にしたり、あるいは日々の単調さにふと気づいたりして、言葉にできない苦痛や行き場のない状況に苛まされるとき、孤独は始まります。

誰かと疎遠になると、人は痛みを感じます。その痛みと結びついたものこそが孤独であると多くの方は考えますが、でも本当は、ひとりでいることの寂しさは他者の苦しみにこそ関係しているのです。他者に向けて心を開き、彼らのためにその苦しみを引き受けるとき、はじめて孤独は訪れるのです。

そんなわけで、他者に会うこと、そして同時に孤独についてじっくり考えることができる空間として、塔の建造を提案します。場所としては人里離れた山奥が最適ですが、人々が足を運びやすいように、街中に設置することもありえます。

地下5階、地上15階のビルを建造し、ひとり用のエレベーターをそこに組み込むこととなります。

地上の各階は景色を楽しめるように全面的なガラス張りで建てられますが、地下の各階はコンクリートで作られます。エレベーターの中は広々としているものの、ソファや椅子など、座席を置くスペースはありません。それは、体を休ませるのではなく、心の持ちようを変えるための空間なのです。

この塔は観光施設でも宗教的な瞑想の空間でもありませんが、利用にあたってはいくつかの規定があります。

この塔にぴったりの利用者は、他者と対面することを恐れる人々、あるいは見慣れない状況に身を縮ませる人々ですが、そのような人々はこんな場所を自分から探し求めたりしない可能性が高いでしょう。

エレベーターに誰も乗っていないときも、無人のままに運転されていること自体が孤独の象徴として機能することになるはずです。

贖罪の公園

世の中には、暴風雨に襲われることがなく、それゆえにその到来を待ち焦がれる人々がいます。

暴風雨が起こらない理由は特定の地理的な環境ではありません。そうではなく、ある地域において社会的・資本的システムが生み出す条件によって、少しずつ暴風雨が姿を消していったのです。

暴風雨の消滅はたしかに自然現象です。とはいえそれは、人為的に構築された厳しい歴史のある場所で、より急速に進行するようです。ここで言う「人為的な歴史」という概念は、最低限の生活のあり方と資本主義の結果として拡大する階級との衝突のことです。この歴史は、社会の成員である人々の精神の中で、意識されない自然なエネルギーの流れとして作用します。

このような精神のありようは場所に影響を与えます。それによって、その場所は豊富な物資と多数の制度で溢れかえるようになります。それがまた人々の感情に悪い影響を与え、まさにこの段階において、彼らは困難な過去の再来を待ち焦がれるようになるのです。

革新から崩壊へ、崩壊から革新へと続くこの種の循環的な構造は、神話に基づくことではじめて可能になります。ここで言う「神話」とは、現代の資本主義と古代からの原型的な秩序が置換される、あの循環的な構造を指します。だから、どうしても、暴風雨を再来させなければならないわけです。

そこで、暴風雨の再来を待ち焦がれる人々のための空間が必要になってきます。この空間は、誰にでも作ることができます。一人だけのための空間なので、あまり広さは要求されません。ポンプをきっちりと機能させるのに十分なエネルギーさえあれば大丈夫です。

この空間で生み出される暴風雨は本物ではありませんが、降りしきる雨の下で、利用者は涙を流し始めるかもしれません。あるいは、水圧にもよりますが、自分の罪が洗い流されていると感じるかもしれません。

この公園をもっとも必要とするのは、一人あたりの収入が25,000ドル以上の国に住む人々でしょう。この25,000ドルという平均年収の数字は、たとえば、地域の人口の少なくとも三分の二が遵法精神を持つ人々で占められること、そし

て同じく少なくとも三分の二が貧困層を助ける人々で占められることを意味します。

国内総所得が1,000ドル以下の国々においても、この空間の設置は、別の形で人々を援助することになるでしょう。

勝利の広場

この広場が設置できるのは、地域の人々のうち三分の二以上が自分自身に満足している場所に限定されています。勝利とは、個々人が自分に勝つかどうか懸かっているからです。

そうした個人的な勝利を、ナルシシズムやエゴイズムと同一視するのは危険です。個人的な満足が本当に意味するところは、すすんで自身を犠牲にすることにほかならないのですから。自己犠牲が為されるのは、集団として発展すること、あるいは集団的な信念が社会全体を変革できると強く信じるからこそなのです。国家は人々に、発展が進むことで、やがて自然と個人的な満足がもたらされるという考えを信じ込ませようとします。それが成功するときこそ、勝利は始まるのだと言えるでしょう。

このスペースを構築するには、約10万平方メートルほどの空き地が必要になります。

まず広場の真ん中に五つの点を打ちます。参加者はそのひとつを選び、そこをスタート地点として他の点へと移動していきます。この動きによって、星の形が浮かび上がるわけです。

調合された溶液を垂らしながら歩くことで、この動きの軌跡が地面に残されます。

最適なのは、エポキシ樹脂をベースとした耐久性のある塗料です。使用する色については自由ですが、お勧めは赤と青です。

歩くペースはあまり問題ではありません。が、できるだけ速く歩くことで、より確固とした決意が育まれることとなります。五つの点を巡り終わったら、塗料を乾燥させるために、しばらくの間は動きを止めましょう。乾燥する前に踏まれるとかなり厄介な状況になるので、意味もなくウロウロしてはいけません。

塗料が乾燥したら、また同じ行為を繰り返します。

実行者はひとりでもかまいませんが、多ければ多いほど、より多様な星の形が浮かび上がることになります。

広場が完成するのは、この行為が約1万8百回繰り返されたときです。広場が仕上がったとき、私たちの過去はその栄光を讃えられたことになり、そして私たちは、明るい未来の歌を口ずさみながら、自信を深めるのです。

平和の広場

もしも平和の意味するところが衝突や敵対性の不在なのだとしたら、そのひとつのあり方として、まず気楽さを挙げなければなりません。それは進歩として知られる理想の端をより柔らかくしてくれるでしょう。

感情だけでは共同体をうまく機能させることはできない、という広く共有された考えに基づいて、ますます専門的に特化された、完璧なシステムが作られています。しかし、それがいかに高度なシステムであっても、そこには常に、失望や怒りへと向かう衝動があるのです。そのような衝動を無視しないという態度が示されている場所は、それだけで、かなり民主的で進歩的な社会であると考えられます。

衝突の原因となるのは、宗教、イデオロギー、人種、領土といった、人類と同じくらい長い歴史を持つ多くの問題です。しかし、それらが排除されれば自動的に平和がもたらされるかと言えば、そんな単純な話ではありません。排除が完全完璧に宣言された瞬間に、どこかの誰かが泣き始めるでしょうから。

時には誰かに平和な気持ちをもたらすにあたって、些細な物事への関心や配慮は、大きな問題における妥協と少なくとも同程度には、寛大なジェスチャーになりえるのです。

平和の広場を構成する視覚的あるいは空間的なすべての要素が目指すのは、訪れる人々に政治的な影響を与えることではありません。このことを明確に示し、このような考えを弱める（もっと正確に言えば、このような伝統的な観念を壊す）ために、複数のベンチとひとつの彫刻作品を巨大な空き地に設置します。

つまりほとんど何もないわけですが、とはいえ彫刻はどうしても必要です。公共の仕事であるかぎり、その街の行政は、税金が納税者本人のために使われたという視覚的な証明を求めるものだからです。

そうであっても、空っぽの空間だけで平和の感覚を呼び起こすことは、慣れない人々に対しては難しすぎるかもしれません。

そうした潜在的な困難を軽減するために、厳密で精緻な科学技術に基づいて、季節によってベンチと彫刻の表面温度が変動するようにします。

つまり、季節によって、広場の底部を冷やしたり暖めたりする装置が設置されることになります。夏は地面およびベンチと彫刻が冷やされるので、人々はリラックスして寝転がるでしょう。冬はそれらが暖められるので、寒い中で友達を待つことはもはや苦痛ではなくなります。

付け加えると、この広場は、路上生活者にとっては完璧な寝床として機能するかもしれません。都市でそのような場所を見つけることは難しいですから。この広場が作られてもなお、場所取りなどをめぐって争いが起こるとすれば、もはや、人々は平和が実現する可能性を信じられなくなるでしょう。そして、平和を見つけるには、それぞれが自分の理想と共に生きるしかないという社会的な合意に至ることになるでしょう。

自由の広場

自由とは抽象的な言葉なので、広場をそのように名付けることは難しいはずですが。でも奇妙なことに、世界の多くの国々では、ある種の象徴性を持つ空間にこの名前が使われています。

しかし少なくとも、そうした自由の広場が、歴史を何らかの形で反映しないように気をつけなければなりません。反映してしまう場合でも、外国人としての視点を基本に据えて、はっきりとした政治的な意図が立ち上がらないようにする必要があります。そして、そのようなスポットを設置する場所としては、人口のうち三分の二以上が「自分たちは十分に自由だ」と感じている地域(国)だけを対象にするべきです。

まずは、高い建物に囲まれた、質の高い平坦な空間が必要になります。

いつも過去の出来事に苛まされている人々、現在の問題を未来に押し付けることで未来と現在をごちゃ混ぜにする人々、過去よりもみすぼらしい未来が来ることを不安に思う人々。このような人々が、それらの建物の屋上まで上ることになります。

屋上に着いたら、塗料の詰まった風船を手に取ります。塗料の色は赤で統一されます。色がバラバラだとおかしな結果になる可能性があるので、はじめから単色にこだわるのが最適なのです。

屋上に着いたら、見下ろして、狙いを定めて風船を落としてください。風船は地面に当たって破裂し、色が広がります。不安に襲われていた人々は安らぎを感じるでしょう。一方で、いたずら好きな人々は言葉を失い、疑い深い人々は爆笑するでしょう。そして、幸福感に満たされていた人々は幸福感の代わりに懸念を周囲に広げるでしょう。こうして、すべてが平等になります。

もしもこうした感情をひとつも持ち合わせていない人々が立ち寄ったら、そのときは言い争いが起こるでしょう。

倫理の塔

倫理の塔を建てるには、何よりもまず、社会全体から適切な同意を取りつけなければなりません。

塔の設置について広く社会的な同意を得ることに成功できるのは、少なくとも、人権について進歩的な観念を持った場所だけでしょう。そこは、社会的な寓意に溢れた場所に違いありません。

宗教が強い影響力を保ち、倫理的な振り舞いよりも信仰がより強く機能する場所（国）、あるいは慈善精神が発達しており、人口の半分が貧しい国々の子供たちにお金を寄付するような場所（国）において、この塔が建てられることはまずありえません。

この塔は単なる彫刻ではなく、人々はその中に入り、先端まで登ることができません。とはいえ、誰でも入場できるわけではありません。まずは厳格な条件に合致する必要があります。

基準を適用する対象となるのは、以下に挙げるような人々です。

生まれた日から貧困の中にあり、毎日の食事に苦勞してギリギリの暮らしをする路上生活者たち。破産によって生活を破壊され、絶望に生きる浮浪者たち。都市における自分の生活と鳩の暮らしを比べて、より充実した後者を羨む貧民たち。手に入れた時間があまりにも膨大で、途方に暮れるアーティストたち。炊き出しを求めて行列することが日課の、烙印を押された高齢者たち。生計を立てるため、親元を離れて暮らすティーンエイジャーたち。希望を抱いてこの地を踏んだのに、その希望と故郷に戻るという切望しか心の拠り所がない外国人たち。一年間ずっと誰とも会話を交わしていない、社交性を失った薬物中毒者たち。つまり、経済的に破滅し、あるいは社会から拒絶され、この塔に登ることの他に何もやることがない人だけが、入口にあるフロントデスクで申し込むことができます。その際、社会的な地位や経済的な問題など、自分の情報を提出しなければなりません。

この手順に合格した人々には、塔の先端に着いたら一時間そこに立ち続けるという過酷な条件のもと、まず3万ウォン（30ドル）が支払われます。

厳しい境遇にあるからというだけで個人の体が公共の場で晒されるわけですが、あまりにも酷くて恐ろしいイメージとして、それは地域の人々に衝撃を与えるかもしれません。その一方で、観光客や訪問者は、生きた彫刻として、あるいは少なくともカメラを向ける価値があるものとしてそれを捉え、駆け寄ってスナップ写真を撮るでしょう。

お金がなくて訪れる人々からお金を作りたくて訪れる人々まで、さまざまな人々が利用を求めます。だからこの塔は、涙と失望、怒りと苦難が吹き荒れる場となって、さまざまな個性や権利のあり方に直面することになるでしょう。

この塔が実現すれば、人類愛を持つ人々は、貧しい人々を助ける社会的な機関の構築を目指して動くでしょう。社会的な地位の高い聡明な人々は、経済的な政策を通じて問題を解決しようとするでしょう。優しい心を持つ人々は、胸を痛ませて祈るでしょう。愚かな人々は、いつのまにか自身の幸せな生活に感謝するようになるでしょう。それ以外のほとんどの人々は、人間が生きる状況について、深く考えざるを得なくなるでしょう。

たとえこの塔が実現しなくても、それに登ってみたいと考える種類の人々は、いずれにせよ、やがてそのような状況に身を置くことになるはずです。

栄光への道

世の中には、栄光の瞬間が訪れるのを待ちきれない人々や、かつて成し遂げたことの輝きにしかゾクゾクしない人々があります。

栄光において、重要なのは態度です。通常の場合、栄光は、抽象的な思考を通じた純粋化によって生じます。あるいは、集団的な利益のために目標を達成した場合、栄光は自己破壊的なエネルギーを内に秘めたひとつの神話として立ち現れます。それは、部外者にとっては背筋が凍るような光景として現れたり、状況によっては、ひどく馬鹿らしいものとして受け取られたりします。

なぜなら栄光とは、多くの場合において、過去や現在の出来事についての、キラキラと輝くイリュージョンでしかないからです。もしくは、多くの人々が、進歩に身を捧げることや、際限のない向上のために命を懸けることこそが栄光への道であると信じているからです。

それでもなお、ここでは、メタファーをいくらか混ぜ合わせることで、具体的な形で栄光への道を示したいと思います。

まずは都市の打ち捨てられた地域で、一直線の道を選びます。それに面したビルの表面をすべて白く塗り、まるで空間そのものが浮遊しているような、魅力的な効果を作り出します。

それらのビルの外壁あるいは屋上に、スタジアムで使われるような強力な投光器を、地上から6メートルの高さになるように取り付けます。10平方メートルの領域ごとに、1万ワット相当の明るさで照らさなければなりません。そのためには、1000ワットの照明が10台、1メートル間隔で設置される必要があります。

通りの全体を照らすには、相当な電力を消費することになります。しかし、その場所（国）に住む人々の同意を取りつけること自体は楽観視されています。偉大な栄光に到達するためなのですから。どんなに豊かな地域（国）に

設置された場合でも、一日に一度、日が暮れてから約1時間の間は照明をオンにすることが推奨されます。

これは、エネルギーの節約というだけでなく、より劇的な効果を生み出すための正しい方法なのです。

この通りが完成すると、生き生きとした都市の光景は捨て去られます。日常はもはや手の届かない場所にある、という考え方そのものが日常的な概念となって、弁証法的な視点へと折り込まれていくのです。

そこでは、終わりなく続く珍妙なパレードや壮大なモニュメント、あるいは展覧会や美術館がもたらすような、目を眩ませるイリュージョンと同じ効果が生み出されます。それによって、栄光を迎えることへの希望がもたらされるのです。非現実的で夢幻的な環境の中、眩い路上で、歩行者たちは互いと顔を合わせるようになります。

出会いの広場

この広場は、他の人々と出会うことに恐怖を感じる、あるいは他者と出会うことについて悲観的な考えを持つ人々を対象とした、社会的な空間として意図されています。

この広場にはあまり費用はかからないので、まずは地域の人々から承認を得ることが重要です。同意を得たら、続いて、今にも崩れ落ちそうな5階以上の古いビルを買い上げます。都市部では老朽化したビルは解体するのが通例ですが、それにならって、このビルも業者に解体してもらいます。

解体のあとに残された瓦礫から、突き出たパイプ、割れたガラス、尖ったコンクリートの破片など、危険な部位を取り除いたり砕いたりします。

鋭い破片を片付けたら、足が落ちてしまいそうなサイズの穴や開口部をみつけて、コンクリートで覆っていきます。

すべての穴がコンクリートで埋められて、そのような処理を受けたパーツと崩れたままの瓦礫だけが残されたとき、広場は完成します。

ビルは巨大な彫刻のように見えるかもしれません。でも、通りがかって一番高いところに登った人にとっては、丘のようにも感じられるでしょう。バランスを取るためにポーズを整える人々を見ると、自然と話しかけたくになります。「地形のせいでポーズが妙になってしまいますね」などと言いながら。こうして、広場の形状は、対話を始めるための口実として使われるのです。

どうしても誰かと顔を見合わせる状況にあるので、気が楽になります。そして、相手の話すこと、身のこなし、そして気遣いを通じて、ついに真の出会いが訪れます。

この広場では、誰もが普段の生活ではなかなか見られない奇妙なポーズを取ることになるわけですが、それは見物人に対しても新しい景色となって現れるでしょう。

戦争、テロリズム、地震といった大惨事による痛ましい記憶が根深い場所は、この広場の立地としてふさわしくありません。そのような傷ついた地域には、

そもそも、このような広場を設置しようと考えべきではないのです。名前を変える必要が出てきますし、何よりも、大惨事の傷は決して消えることなく、さまざまな形で記憶の中に居座り続けるものですから。

Text: gimhongsok

Translation: Yuki Okumura_